日本建築学会大会学術講演梗概集
（東海） 2012 年 9 月

被災実態の展示を通した地域内外での情報共有の試み
東日本大震災後の佐原における復興まちづくりに関する研究　その２

正会員　○安東政晃＊　同　永瀬節治＊＊
同　松本綾＊　同　窪田亜矢＊＊＊
同　村本健造＊

東日本大震災　情報共有　佐原
展示イベント　地域コミュニティ　復興

1. はじめに

前稿では、被害の実態について調査し、歴史的建造物の修復過程や、商業・観光などにおける課題が明らかとなった。しかし地域の被災状況は、大きなレベルでは共有されていても、居住する地区や建物の性格（歴史的建造物であるか否か等）により被災実態や抱える課題はそれぞれ異なり、それらはなかなか共有されにくいというのが現状である。また訪れる観光客にとっては、東北地方沿岸部の被災状況の報道が多い中で、佐原の被災については十分に認識されていない場合もある。

地域が一丸となって復興を進めていく上では、それぞれの立場の違いを超えて、被災と復興に関わる情報を共有することが重要であると考える。そこで東京大学都市デザイン研究室では、佐原に関わる地域内外の主体間で、被災後の情報共有を促すことを目的とした取り組みを行った。本稿ではその内容を報告するとともに、被災後の情報共有を図る有効な場のあり方を考察する。

2. 共有を図る情報とその方法

2.1 共有されずらいミクロなスケールの被災実態

行政や企業によって被災状況の調査が行われる一方で、我々が調査してきた被災実態のなかでも「地域の人々の復興に対する想い」などは、なかなか取り上げられなかったり表出しにくい内容である。そういった情報は地域が団結するには必要だが、自然には共有されにくい実情がある。そのような情報も含めて、被災実態の共有を図った。

2.2 情報共有の場としての地域イベント

様々な主体間での情報共有を目的とするため、その機会として、人々の集まるイベントを活用した。佐原では、震災以前から町並みや通りを舞台として行われる地域主体のイベントがあり、住民や観光客が訪れるため、情報共有の場としても有効であると考えた。そこで、重伝建地区・景観重点区域内の空き店舗を利用して、調査内容をまとめた展示を行った。

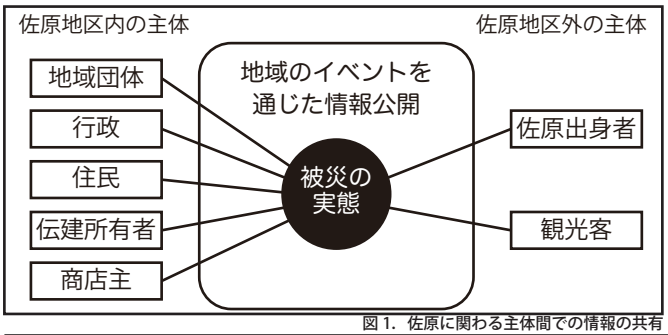

図 1. 佐原に関わる主体間での情報の共有

震災から 150 日が経過した 8 月 14 日～ 16 日に開催された「盆ふぇすた」と、さらに 110 日が経過した 12 月 3 日 4 日の「建物公開」の２回の地域イベントで展示イベントを実施した。

3. 「盆ふぇすた」での展示イベント

3.1 展示イベントの概要

「盆ふぇすた」では複数の拠点でイベントが行われている。そのひとつとして空き店舗を利用し、「建物や通りなどの歴史的景観を構成するものの被害」「周辺地域の液状化被害」「観光・商業が受けた影響」「震災を受けて行われた地域の助け合い」「震災を経た後の観光に対する地域の商店主の想い」ついての調査結果を展示した。面的に展開される地域のイベントで被災実態に関する情報を提供し、それらを実際に見てもらうことを意図して行った。

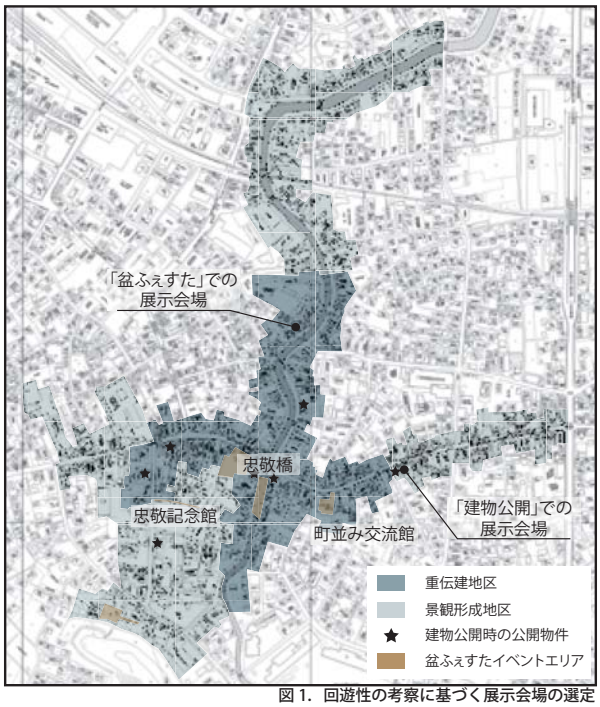

図 1. 回遊性の考察に基づく展示会場の選定

図 1. 展示風景

図 1. アンケートの実施

Try of information sharing among people concerned through displaying of damage states : A study of post-earthquake restoration in Sawara(Part.2)

ANDO masaaki, MATSUMOTO aya, MURAMOTO kenzo
NAGASE setsuji, KUBOTA aya

3.2「盆ふぇすた」でのアンケート結果

展示観覧の後に、来場者に対して展示についてのアンケートを実施した。質問内容は、「展示内容について」「震災と復興まちづくりについて」「復興のために最も重要なこととその理由」とし、自由記述欄を設けた。

来場者が震災と復興まちづくりに対して感じたことは、「地域コミュニティのつながり、助け合いの大切さ」が、「歴史的町並みの大切さ」よりも多かった。自由記述欄では、地元の人の回答に①「こんなに大変でも佐原を離れない人が多いのは人の繋がりがあるからだと思う。佐原は田舎で何もないが、何もない良さや人懐っこいことやおせっかいを大切にして、観光地ではない観光に目を向けてほしい。」②「今後も市民とはまた違った視点で、佐原を捉え直す機会をつくっていただけると市民として大変嬉しく思います。」という意見が、香取市外の人の回答に③「千葉だと旭などが報道されていたことは知っていましたが、佐原も大きい被害を受けていたのは知りませんでした。」④「この展示があったこと（まとめて情報を公開）で、詳細がわかり、良かったと思いました。」という意見が得られた。また、復興のために最も重要なことについては、地元の人からは、⑤「今後生活していくためには『歴史的町並みの復興』『観光客の誘致』『周辺地域との連携』もともに必要ですね。私たちはコミュニケーションからお手伝いしていきたいね！」という意見が、香取市外の人からは、⑥「被災した家屋への財政支援が重要。個人ではまかないきれないと思うので。」という意見が得られた。

4.「建物公開」での展示イベント

4.1 展示イベントの概要

「建物公開」では7件の歴史的建造物が特別に一般公開される。そのうち、現在空家となっている物件を利用して展示イベントを行った。今回の展示内容は「盆ふぇすた」以降の復興に関する情報を加えるとともに、被災直後の共助の面でも活用された「井戸の資源としての可能性」についても展示を行った。

4.2「建物公開」でのアンケート結果

「盆ふぇすた」の時と同様にアンケートを実施した。震災後260日が経過した時点で、建物の修復が進み始めていたこともあり、復興のために最も重要なことについては「歴史的町並みの復興」「被災した家屋への財政支援」という意見が多く見られた。また、展示内容に対する意見では、これまで注目されていなかった井戸の可能性にも関心が集まった。自由記述欄では、⑦「震災を機に改めて佐原のまちのあるべき姿について考えている人が多いと展示から感じたので、そういう人達の意見を取り上げ、集約や取り組みの連携などがあるといいなと思った。」、⑧「まちについて佐原住民が共通して考えていかなければ。」という意見が得られた。

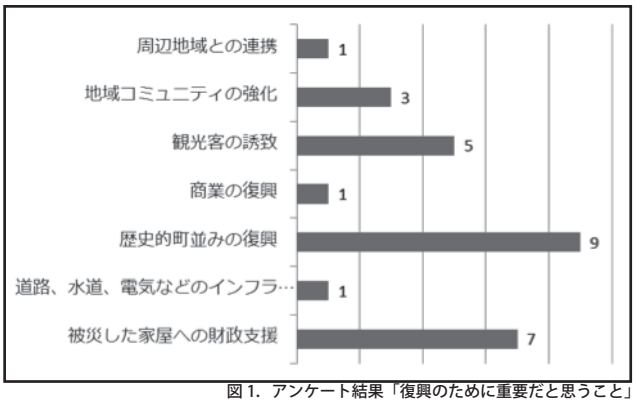

図1. アンケート結果「復興のために重要だと思うこと」

5. アンケート結果から見る展示の効果

5.1 地域コミュニティの再認識

地元の人からの①、②の回答などから、この展示イベントによって地元住民の地域コミュニティに対する意識が高まったことが伺える。

5.2 詳細な情報の共有

被災実態の情報に対する意見としては、地元の人からの③のような回答や、香取市外の人からの④のような回答から、地域内外を問わず、佐原に関わる人々に対して、被災実態を整理し公開することの意義が見られた。

5.3 復興への意識の高まり

今後の復興に対して重要だと思うことについて、地元の人から⑤の回答や、香取市外の人からの⑥の回答などから、佐原の現状を理解し、復興に向けて意識を高める場として、今回行った展示会が機能したことが伺える。⑦、⑧の意見では、佐原では地域で結束することが復興には必要だろうという意識が伺えるが、今回の展示イベントは将来のビジョンを描くきっかけともなったと言える。

6. おわりに

二度に渡って被災実態の情報の展示を行ったが、上記のように、こういった情報共有の場を設けることの意義を見て取ることができる。今回扱った被災実態では様々な情報が存在したが、それらを整理し、公開することで佐原地区内の人が地域の実態を認識し、地域の力で復興に向かうような意識を持つきっかけとなった。また、人々の集まる地域イベントを情報共有の場として活用することは、地域内での情報共有以外にも、地域外の人が震災後からの連続的な流れを知ることにも寄与すると言える。地域外の人には、佐原出身者も含まれており、そういった地域を離れている人々が地元に関する情報を手に入れる機会にもなっていた。

佐原では、地域コミュニティに見られるような、人と人が密接に関わる姿勢がこれからの観光にとっても大事であるという認識が共有されていくことが今後期待される。従来の供給、需要の構図ではなく、コミュニケーションを通して佐原住民が観光客との関係を築き、深めていくような観光の形を模索し、リピーターとなる観光客を増やしていくことが望ましい。

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　修士課程
** 和歌山大学観光学部　講師
*** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　准教授

*Master Course., Dept.of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo
**Assistant Prof., Faculty of Tourism, Wakayama Univ.
***Associate Prof., Dept.of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo